

## 地域と学校の連携をととした校内放送による防災教育プログラム

Disaster prevention education programs broadcast through the  
collaboration of schools and school district

此松 昌彦  
KONOMATSU Masahiko  
(和歌山大学教育学部)

今西 武  
IMANISHI Takeshi  
(和歌山大学客員教員)

辻 正雄  
TSUJI Masao  
(紀の川市立荒川中学校)

和歌山大学では地域や学校で利用できる防災教育プログラムを開発している。今回は中学校の校内放送を利用して、生徒、地域の防災ボランティアそれに和歌山大学が連携して、コンテンツの作成、放送を行う新たな防災教育プログラムを開発した。それを荒川中学校において実践した結果、生徒や地域の防災ボランティアの防災意識が高まり、校内放送を聞いた生徒にも防災意識を高めることができた。また地域と学校の連携の課題についても明らかにした。

**キーワード：**防災教育、校内放送、地域連携、学校支援地域本部、中学校

### 1. はじめに

和歌山県では学校における防災教育が進んでいる。それは防災教育チャレンジプラン（主催：防災教育チャレンジプラン実行委員会）や1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」（主催：兵庫県 他）などの全国的な防災教育コンテストには毎年、和歌山県の学校が入賞やノミネートされていることからわかる。

和歌山県でどうして防災教育が活発なのかというと今世紀前半に東南海・南海地震が発生し、津波や県の多くを占める山間地域の孤立が心配されるため、自治体をはじめ各地域で防災対策は重要な課題として位置づけているためでもある。つまり防災教育は地域性の高いニーズにもとづいて行われている。東南海・南海地震の発生する頃は大人であろう子どもたちに、今の段階から防災知識をつけておくことは、少しでも災害を減らす観点からも重要である。危機管理意識を持つことで、被災者を減らしたり、救出を手伝い、ボランティアにつながる。

学校での防災教育は、総合的な学習の時間などを利用し、カリキュラム内で行うことが多いが、最近は一方向的な講義形式ではなく体験的なものを取り入れた防災教育が多くなっている。しかし多くの学校での防災教育は、総合的な学習の時間にも入れておらず、体系的な教育を行っている学校は少ない。行っても講座形式で消防署、自治体防災担当者の講演などの単発で終わっていることが多い。それは学校現場でどのように指導したら良いのか理解できていないためである。学校現場では日常の忙しさの上になかなか新しいことを

行う余力が少なくなっている。このような現状で、新しく防災教育を行うことは強いエネルギーを必要とする。特に地域と学校の連携が重要になる。どちらかだけが一方的に頑張っても成立はしない。防災知識をたくさん持っている教員なら別かもしれないが、一般的には困難である。そのような現状で和歌山大学防災研究教育プロジェクト（代表：此松昌彦）では地域や学校で利用できる防災教育プログラムを開発してきた（此松・今西，2009）。今回は地域と学校の中で連携して、新しく開発した防災教育のプログラムを実践したので報告する。

特に一般的に教育では教える側と学ぶ側に区分されてしまうが、今回の取組では防災教育のプログラム作りに参加しながら自分も学ぶというスタイルで行った。他者から与えられる講座中心の受身的な防災教育を変えていくようにすることが大きな目的であった。

そこで今回の実践した防災教育は昼休みの校内放送を利用した。生徒が地域の方と一緒に放送コンテンツを作成し、校内放送で流して学校の全生徒に聞いてもらうという企画を実践したのである。

今回の新しい防災教育の実践は紀の川市立荒川中学校において平成20年度に行った。これは偶然にも平成20年度から開始された学校支援地域本部を通して、新しく防災教育を行いたいという学校の要望と大学がうまくかみあい、さらに生徒と地域がうまく連携し、完成した実践である。これはどのように中学校、地域、大学と連携して可能になったのか。またその後の生徒の変化についても調査を行ったのでこの実践の効果についても考察した。今後の地域で学校と新しく防災教

育を取り組もうというための一助になればと考え報告する。

## 2. 校内放送を有効活用した防災教育

### 2. 1. 防災教育プログラムの開発の目的

校内放送を利用した防災教育プログラムは、筆者である今西 武が主担当となり、和歌山大学防災研究教育プロジェクトで開発したプログラムである。

このプログラム開発の意図は次のようなことからである。前にも述べたように一方的に他者から与えられる講座中心の防災教育が主流となっている。その結果、生徒たちの防災に対する興味や関心は低く、残念ながら防災教育が生徒たちに今ひとつ浸透していないのが現状である。そのような現状を打破するには生徒自らが興味や関心を持って防災教育の活動プログラム作りに参加し、その活動プログラムを用い、自らが率先して防災教育の実践活動に取り組むための仕組みづくりがどうしても必要になる。「校内放送を有効活用した防災の啓発活動」プログラムは、その仕組みづくりに力点をおき生徒の防災力の向上を図ることを第一の目的として開発を行なった。

また、大地震などの大災害が発生すれば多くの被災者たちは学校に避難することになり、学校はたちまち地域の避難所に一変する。そのために学校と地域は大災害に備え日頃から連携を図る必要がある。残念ながら学校と地域の連携も現状では薄いと言わざるを得ない。そのような点からも「校内放送を有効活用した防災の啓発活動」プログラムは学校（教員）生徒と地域が連携を強化しながら学校と地域の防災力の向上を図ることも目的としている。

その上で「校内放送を有効活用した防災の啓発活動」プログラムを企画立案する際に留意した点を列挙しておく

- ・荒川中学校にある既存の施設を有効活用する。
- ・プログラムを推進する中心メンバーは生徒と地域の人たちで、生徒と地域の人たちがプログラムの主役である。
- ・生徒と地域の人たちが防災の基礎知識を楽しく共に学び、その知識を先生や他の生徒に伝えることが大切だと考える。
- ・当プログラムを推進するにあたり教員に過度の負担を強いることをしない。

教員が防災を学び、そして生徒に防災を教えるという従来の防災教育のあり方から離れ、教員も生徒と一緒にになって防災を学ぶスタンスで良いと考える。

- ・その他

それらを総合的に考慮して企画立案されたのが「校内放送を有効活用した防災の啓発活動」プログラムである。

### 2. 2. プログラムの概要

校内放送をメディア（媒体）とし有効活用し、生徒

と地域の人たちが一緒にになり番組の台本（番組コンテンツ）を作成し、防災番組の録音まで手がけ、自らがパーソナリティ（番組司会者）となり校内放送を行なうことにした。それを学校の生徒が聞くことによって防災知識が伝わる仕組みである。

番組構成は、生徒と地域の防災ボランティアとの対話形式で進行する。具体的には生徒が地域の防災ボランティアに防災に関する質問を行い、その質問に対して答えるという、いわゆるQ&A形式を取る。

Q&A形式の台本作りの参考図書として「12歳からの被災者学」(メモリアルコンファレンス神戸：著 日本放送協会)を使用した。この書籍は防災の専門家と阪神淡路大震災を体験した人たちが自分の体験をベースに防災の必要性を説いた本である。「12歳からの被災者学」は文字通り、12才の子供が読んでも本の内容が理解できるように平易な文章で書かれている。大人が読んでも参考になる巧著である。台本は生徒と地域防災ボランティアがこの参考図書をもとに台本を作成し、今西が台本原稿をチェックし、監修する。

ここでは生徒と地域防災ボランティアが参考図書の文章をQ&A形式（対話形式）に変換する作業が発生するため、何度も読むことになる。そのため防災知識が自然と身につけることをねらっている。またこの参考図書を利用した一因にもなるが、番組制作には専門的なノウハウや経験が必要で、番組制作の経験のない生徒と地域防災ボランティアにとって多くの時間と労力が必要なる。そのことが原因で精神的な負担が強えられることになれば、防災教育に取り組むことが困難となる。そのためにも台本を作りやすいこの参考図書を選んだ。

校内放送の位置づけとして学校の既存施設である校内放送を単に学校からのお知らせを各教室に伝えるものとして捉えるのではなく、校内放送を防災番組が流れている新しいメディア（媒体＝放送局）であると位置づけた。そのために番組名も「防災ステーション」とネーミングした。

### 2. 3. プログラムの流れ

一般的なプログラムの導入から録音・放送までの流れを以下に示した。

- ・学校に対しプログラムの趣旨説明を行なう。



- ・学校がプログラムの導入を採択する。



- ・学校が生徒と地域のスタッフを選出する。



- ・生徒・先生・地域のスタッフ・和歌山大学のスタッフが一堂に介し、プログラム内容と実施要領などの確認作業を行なう。



- ・生先と生徒と地域のスタッフにより校内放送の台本作りを行なう。



- ・校内放送を開始する。



- ・一般の生徒が校内放送の評価を行なう。  
評価により番組内容に手直しが必要となれば手直しを行なう。



- ・評価を参考にしながら校内放送を行なう。



- ・以降、その繰り返しを行なう。

### 3. 荒川中学校での実践

#### 3. 1. 実践を行うに至った経緯

荒川中学校では、平成19年の秋から危機管理の重要な一つとして防災教育の充実、特に、大規模地震を想定した大幅な防災教育の見直しを平成20年度からの3カ年計画で検討していたところであった。

しかし、この時点では平成20年度に地域と連携した「学校・地域連携型の総合防災訓練」を一つ導入する程度のことしか考えていなかった。それは、いままで学校が地域と連携して様々な取組を行うことに余り積極的でなかったことに原因していると考えている。

平成20年3月初旬に紀の川市教育委員会生涯学習課より、文部科学省が平成20年度から全国全ての市町村の中学校区を単位に学校支援地域本部事業を立ち上げるための予算をとり、事業実施を要望する学校を募っていることを知った。

そこで、一つは、地域と連携した体験型総合防災訓練を行い学校も地域も防災意識の高まる取組を実施するという目的と二つ目は、学校教育のあらゆる面で保護者や地域の教育力を学校に活かしていただき、同時に学校が持っている教育力を地域に貢献することを目的とした取組が紀の川市へ予算が入れば積極的に本校を中心とした周辺の小学校もできるのではないかと考え「学校支援地域本部事業」に取り組むことを教頭・社会教育窓口教員と相談し決定した。

すぐに、3月はじめの職員会議で「学校支援地域本部事業」について職員に以下のように説明した。

- (1)学校支援ボランティアの方々に学校に入ってもらうことによって、先生方が本来の子どもたちと向き合う時間を確保ができる。
- (2)チーム活動を支援する部活動支援ボランティアや放課後の補充的学習指導のお手伝いをいただく放課後学習ボランティア・体験的活動を行う時のコーディネーターなど教員がいままで行ってきたことを一部助けていただくと共に更に厚みを持って子どもたちに指導できる体制をつくることができる。
- (3)荒川中学校という地域密着型の特色ある学校づくりを行ってきた学校の特色を更に活かす。

こうした3点は、職員にすぐに理解され、受け入れられた。職員の多忙化がますます進む学校現場で、新しい取組をすすめることはなかなか難しいことであるが、桃で有名な「あらかわ」ブランドを学校教育でも

創造しようというテーマ建てが理解しやすかった。

こうして、平成20年度の4月から「学校支援地域本部事業」が始まり、3カ年計画で進めようと計画してきた大規模地震を想定した地域との連携を軸にする学校・地域総合防災教育の土台が見え始めた。

平成20年4月28日に第1回防災訓練（避難路確認）を終え、秋の地域と連携した体験型総合防災訓練の持ち方を那賀消防署や自治会と相談しながら、紀の川市防災危機管理消防課に相談していた頃、和歌山大学防災研究教育プロジェクトの存在を知った。

平成20年7月3日、荒川中学校に今西が訪れ、学校の校内放送を活用した防災ステーションの話を行い、荒川中学校が取り組みたい中身に合致し、地域の学校支援ボランティアにも協力いただける取組にできると判断した。

平成20年8月21日、早速、夏季休業中の職員会議に提案し、全会一致で校内放送を活用した防災ステーションに和歌山大学の今西 武の企画と監修により取り組むことを決めた。

#### 3. 2. あらかわ防災ステーションの立ち上げ

放送を担当するのは、荒川中学校には放送部がないこともあり、生徒会専門部委員会の安全委員会で行い、その委員会の担当の中村教諭が生徒たちを指導することになった。原稿づくりと放送に関わる地域の大人は、学校支援地域本部事業のコーディネーターに依頼し防災ボランティアを募ることになった。

今回、今西の指導のもと、校内放送を活用したトーク番組風の「あらかわ防災ステーション」の取組を進めるにあたって、学校と和歌山大学・紀の川市危機管理消防課の三者を中心に進めるが、今後の幅広い発展を考えると紀の川市教育委員会学校教育課や桃山地域共育コミュニティー本部・安全委員会（生徒・担当教員）・学校支援ボランティアも参加し立ち上げの会を開催することになった。

平成20年11月13日、上記の団体や機関の代表者が集まり、「あらかわ防災ステーション」の立ち上げの意義と今後の方向性と具体的内容の一部を協議した。

スポット放送的なコンテンツにするか地域の大人と生徒会安全委員の生徒たちが掛け合いで行うトーク番組風のコンテンツにするかについて学校関係者や防災ボランティアは、トーク番組風のコンテンツでは昼の給食時に生徒たちが5分もの間、耳を傾けるだろうかという心配をしていたが、逆に、安全委員会の生徒代表の部長の意見として、スポット的な短いコンテンツだけが毎日流れる場合は、かえって「あっ また同じ放送か」ということで聞かないと思うという意見が出た。

また、番組録音に際し、和歌山大学の施設の一部を借用となった場合は、紀の川市がバスをチャーターして生徒やボランティアの輸送をいただくことや防災危機管理消防課のアドバイスはいつでも受けられるなどの外部的な支援についても話し合われた。



こうして、「あらかわ防災ステーション」が立ち上がった。

### 3. 3. 「あらかわ防災ステーション」の取組内容

#### 【初期段階のタイムスケジュール】

- H.20.11.26 防災ボランティアと今西先生・学校による放送原稿作成に関する打合せ。  
(地域の防災ボランティアが「12歳からの被災者学」をもとに作成し、今西先生が監修する。)
- H.20.12. 8 防災ボランティアの原稿が学校に届く。安全委員会生徒18名全員に配布。  
(第1週分は3年生が担当することになるが、今後、どの回も全員に原稿が渡され自分の当番でなくても目を通すよう、担当教員から指導する。)
- H.20.12.15 「あらかわ防災ステーション」第1週分の原稿読み合わせ会。  
(防災ボランティアと3年生安全委員と中村教諭と今西先生による第1回の読み合わせ会がもたれた。更に、読みやすいように原稿に手が加えられる。)
- H.20.12.20 第1回收録日(桃山IT親子ホール)  
(学校にほど近い施設で、職員の録音機材を借用と学校の機械を使いながら本当に手作りの録音セットを用意し、記念すべき第1回の録音が始まった。)

こうして、安全委員18名と防災ボランティア3名と安全委員会担当の中村教諭ら放送に携わる担当者が集まり、「あらかわ防災ステーション」という校内放送を活用したFM放送風のトーク番組が、NHK出版の「12歳からの被災者学」という本を元に、和歌山大学防災研究教育プロジェクトの今西 武先生の企画・監修のもと原稿づくりと番組録音に取り組むための第一歩が始まった。

都合、44回分の「あらかわ防災ステーション」放送原稿を防災ボランティアが作成し、今西先生の監修を受けながら、桃山IT親子ホールと和歌山大学自主創造



写真1 和歌山大学クリエでの放送収録風景

科学センター(クリエ)を録音場所として6回の収録で全放送テープを作成した(写真1)。

以下に、9週分(全44回分放送)の番組リストを示す。

放送日	タイトル	収録日
1/19	こんにちは あらかわ防災ステーションのスタート	12/20
1/20	地震はなぜ起こるの(1)	12/20
1/21	地震はなぜ起こるの(2)	12/20
1/22	地震は予知できるの	12/20
1/23	どうして被害に違いが出たの	12/20
1/26	揺れているときどうしたらいいの	1/10
1/27	揺れが収まった後はどうしたらいいの	1/10
1/28	人が家の下敷きになっていたらどうする	1/10
1/29	地震がきた時いちばん役に立ったことは	1/10
1/30	どうして火事になったの	1/10
2/2	火事はどうしてすぐに消えなかったの	1/10
2/3	こんなとき地震がきたら	1/10
2/4	電気はどうなったの	1/10
2/5	水はすぐに使えたの	1/10
2/6	水はどうやって受け取ったの	1/10
2/9	家のトイレは使えるの	1/31
2/10	連絡はどうやってとるの	1/31
2/11	正確な情報はどうすれば知ることができるの	1/31
2/12	キミの家の防災度チェック	1/31
2/13	食事はどうしたの	1/31
2/16	着替えや洗濯、暖房はどうしたの	2/15
2/17	避難所のトイレ事情は	2/15
2/18	避難所のお風呂って	2/15
2/19	避難所では家族一緒に暮らせたの	2/15
2/20	意外に役立つ身近なものは	2/15
2/23	被災者たちに混乱や不満はなかったの	2/21
2/24	避難所暮らしを快適にしたことは	2/21
2/25	時間とともに避難所暮らしはどう変わって…	2/21
2/26	避難所で子どもたちは何をしていたの	2/21
2/27	避難所でお年寄りや障害者は	2/21
3/2	外国人の人は避難できたの	2/21
3/3	学校はどのくらい休みになったの	2/21
3/4	入学試験は受けられたの	2/21
3/5	お父さん・お母さんが死んでしまったらどうなるの	2/21
3/6	ペットはどうなるの	2/21
3/9	電車が止まってしまったら	3/7
3/10	災害などで死ぬほど怖い思いをした時にどんな…	3/7
3/11	生死の分かれ目どこに	3/7
3/12	非常時に頼りになるのは	3/7
3/13	家で準備しておくといい物は	3/7
3/16	ふだんから家族で決めておくことは	3/7
3/17	学校ではどんなことができる	3/7
3/18	うちの家具は大丈夫	3/7

## 3 / 19 寝る部屋で気をつけることは 3 / 7

※ 1 / 10の録音は、和歌山大学学生自主創造科学センター（略称：クリエ）にて録音した。

### 3. 4. 「あらかわ防災ステーション」に取り組む生徒たちのようすや変化

荒川中学校は、2期制で年間行事や各種生徒会役員が組織されている。したがって、今回の取組を行うに当たってすぐに任期切れとなる安全委員に取り組ませることはできなかった。10月中旬の後期の生徒会安全委員に切り替わる時期を待って生徒に本取組をおろすことになった。

しかし、平成20年10月末から活動を始めかけた直後の後期生徒会役員安全委員の18名にとっては、寝耳に水の取組だけに何をするのか、地域の大人のひとと一緒にトーク番組をと言われても初めは全くイメージしにくい状況であった。

安全委員会担当の中村教諭と辻が、本取組の概要を説明し11月13日の「あらかわ防災ステーション」立ち上げの会に生徒代表として安全委員会の部長・副部長、そしてそれ以外でも出席できるものは参加し、生徒としての疑問や意見を出すように促した。

立ち上げ会では、極めて積極的な姿勢を持つ3年生の男子生徒数名が出席し、大学教員や市教育委員会の課長・市危機管理消防課の主幹・桃山地域共育コミュニティ本部長・青少年育成協議会会長など多くの大人が並ぶ中で、生徒としての率直な意見を述べることでできたのは今回の取組をすすめる上で貴重であった。

その時、その会議に出席した生徒たちはおそらく、取組の中味についてはほとんど理解できにくい状況であったろうと予想されるが、よそでは何処もやっていない、おそらく和歌山県では初めての取組になるであろうというその好奇心とチャレンジ精神が心を動かし、素直な意見につながっていったのではないかと推測する。

実際のところ、立ち上げ会に望んだ学校の教師サイドも地域の防災ボランティアを含む大人も、9週間にも渡るトーク番組の原稿を作成し、読み合わせをし、録音収録をするという取組内容を聞いただけで、実は、尻込みをしていたのが実態であった。

1回当たり5分程度のトーク番組形態よりも、数秒から十数秒くらいのスポット放送の方が給食中の生徒が聴くには適切で印象に残り、防災教育の効果が上がると予想していた。しかし、立ち上げの実施委員会の司会が安全委員会の生徒たちにスポット放送かトーク番組形式かの放送形態を質問し意見を聞いたところ、今西を除く多くの大人たちの予想に反して、「毎日同じ短い放送じゃ飽きて みんな聴いてくれないんじゃないかな」という意見を出した。

この生徒たちの意見は学校を含め、地域のボランティアなど大人の気持ちを大きく変えさせた一言であった。

給食を食べている最中の生徒たちに向けての校内放送だから短くて印象的なコンテンツを繰り返しおこなう方が生徒たちの耳をこちらに向けさせ、防災知識を定着させるのに効果的だと考えていた固定観念を大きく揺るがした瞬間であり、今西がプランニングしていた放送形態に一気に動き出した瞬間であった。

生徒たちにとっては、まだまだ具体的なイメージはできていない実態ではあったが、積極的にやってみようという気持ちが重要であった。

生徒たちは、12月8日に、防災ボランティアの方が作成した第1週分の原稿を学校から受け取り、12月15日の読み合わせまでに下読みをしておくことが課題となった。

第1週分の放送担当は3年生6名であったが、今後も含めどの回も放送原稿は安全委員全員に配布されることとした。それは、放送する側も下読みをすることで防災に対する意識が高まり、防災知識が身に付くと考えたからであった。

### 3. 5. 放送終了後の生徒からのアンケート結果

（放送終了後、5月に実施したアンケート調査）

平成20年度の卒業生を除いた全校生徒に調査した結果と防災ステーションの放送に直接関わった生徒たちと卒業生への質問と結果を表1～表3に示した。

【放送に関わったパーソナリティー対象】

設問7

「あらかわ防災ステーション」の原稿読み合わせや録音に関わって、大規模地震に対する防災知識がひろがりましたか？（回答16）

※ア、イと答えた割合は75%であった。

【防災トーク番組を聴いていた当時の2年生対象】

設問1

放送を聴く前と聴いた後で大規模地震に対する知識は、自分で増えたと思いますか。（回答79）

※増えたと答えた割合は40.5%であった。

【防災トーク番組を聴いていた当時の1年生対象】

設問1

放送を聴く前と聴いた後で大規模地震に対する知識は、自分で増えたと思いますか。（回答68）

※ア、イと答えた割合は41.2%であった。この調査結果を見てみると、「あらかわ防災ステーション」の放送にパーソナリティーとして関わった生徒の防災に対する知識はいずれも2倍近くの数字を示し、身に付いたと回答している。

【放送に関わったパーソナリティー対象】

設問12

番組放送に関わった時をきっかけに何か一つくらい「防災の知恵」を家で実行したことはありますか？（回答11）

※やろうという意識がうかがえるア、イと答えた割合は56.3%であった。

【防災トーク番組を聴いていた当時の2年生対象】

設問6

表1 「あらかわ防災ステーション」実施者の事後アンケート結果

	男子	女子	合計
卒業生	9	7	16

1. 録音作業は楽しかったですか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. すごく楽しかった	3	33.3%	18.8%	3	42.9%	18.8%	6	37.5%
イ. まあまあ楽しかった	4	44.4%	25.0%	4	57.1%	25.0%	8	50.0%
ウ. 余り楽しなかった	2	22.2%	12.5%				2	12.5%

2. 原稿を読み合わせたりするのは難しかったですか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. 難しかった	2	22.2%	12.5%	2	14.3%	12.5%	4	25.0%
イ. そんなに難しくない	5	55.6%	31.3%	4	57.1%	25.0%	9	56.3%
ウ. 全然難しくなかった	2	22.2%	12.5%	1	14.3%	6.3%	3	18.8%

3. 大学の先生や地域のボランティアの人たちと一緒にやって楽しかったですか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. すごく楽しかった	2	22.2%	12.5%	3	42.9%	18.8%	5	31.3%
イ. まあまあ楽しかった	5	55.6%	31.3%	4	57.1%	25.0%	9	56.3%
ウ. 余り楽しなかった	2	22.2%	12.5%				2	12.5%

4. 録音した番組放送を聴くのは、楽しみでしたか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. すごく楽しみだった	1	11.1%	6.3%				1	6.3%
イ. まあまあ楽しみだった				1	14.3%	6.3%	1	6.3%
ウ. はずかしかった	6	66.7%	37.5%	5	71.4%	31.3%	11	68.8%
エ. どちらともいえない	2	22.2%	12.5%	1	14.3%	6.3%	3	18.8%

5. クラスの友達から何か反応はありましたか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. 反応があった	4	44.4%	25.0%	1	14.3%	6.3%	5	31.3%
イ. 少し反応があった	3	33.3%	18.8%	4	57.1%	25.0%	7	43.8%
ウ. まったく反応がなかった	2	22.2%	12.5%	2	14.3%	12.5%	4	25.0%

6. 5でアまたはイと答えた人のお答えください。どんな反応か短い文章で書いてください。

男子	女子
・「この声、お前達う？」	・「これ、君の声ちゃうん？感情にもってるやん。」
・笑われた	・笑ってました
・「あつ！これお前やん。」的な感じ	・みんな耳をかたむける人が多くなっていた
・笑っていた	・「あつ、出てるやん。」と言われた
・基本的には「どうだった？」という質問を受けた	・「あー、防災のやつ始まったー！！」という感じでした
・「おもしろい。」と言われた	
・少しびっくりしていたようでした	

7. 『あらかわ防災ステーション』の原稿読み合わせや録音に関わって、大規模地震に対する防災知識がひろがりましたか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. かなり身についた	1	11.1%	6.3%	1	14.3%	6.3%	2	12.5%
イ. 始める前より関心を持つようになった	5	55.6%	31.3%	5	71.4%	31.3%	10	62.5%
ウ. 余り変わらない	3	33.3%	18.8%	1	14.3%	6.3%	4	25.0%
エ. まったく知識はひろがっていない								

8. 皆さんの放送を聴いたクラスの友だちや学校の他のみんなは大規模地震から身を守るための大切なポイントが身に付いたと思います

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. かなり身に付いたと思う								
イ. まあまあ身に付いたと思う	7	77.8%	43.8%	4	57.1%	25.0%	11	68.8%
ウ. 余り身に付いていないと思う	2	22.2%	12.5%	3	42.9%	18.8%	5	31.3%

9. 録音していた期間(1月～3月)、家庭で放送のことや大規模地震について話をしたことはありますか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. よく話をした								
イ. 何度かだけ話をした	2	22.2%	12.5%	3	42.9%	18.8%	5	31.3%
ウ. 1～3回位は話をした	5	55.6%	31.3%	2	14.3%	12.5%	7	43.8%
エ. まったく話をしなかった	2	22.2%	12.5%	2	14.3%	12.5%	4	25.0%

10. 地震や災害のことに今まで以上に関心を持つようになりましたか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. かなり持つようになった	1	11.1%	6.3%	1	14.3%	6.3%	2	12.5%
イ. まあまあ持つようになった	6	66.7%	37.5%	5	71.4%	31.3%	11	68.8%
ウ. ほとんど変わりはない	2	22.2%	12.5%	1	14.3%	6.3%	3	18.8%

11. また、機会があれば『あらかわ防災ステーション』に関わりたと思いますか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. 思います	3	33.3%	18.8%	5	71.4%	31.3%	8	50.0%
イ. 余り思わない	3	33.3%	18.8%	2	14.3%	12.5%	5	31.3%
ウ. まったく思わない	3	33.3%	18.8%				3	18.8%

12. 番組放送に関わったときのきっかけに何か一つくらい「防災の知恵」を家で実行したことはありますか？

	男子	男子%	全体%	女子	女子%	全体%	合計	合計%
ア. 一つはやっている				2	14.3%	12.5%	2	12.5%
イ. やろうと思うがまだやっていない	4	44.4%	25.0%	3	42.9%	18.8%	7	43.8%
ウ. やろうとは思わない	1	11.1%	6.3%				1	6.3%
エ. どれとも思わない	4	44.4%	25.0%	2	14.3%	12.5%	6	37.5%



表2 「あらかわ防災ステーション」聴取者の事後アンケート結果(1)

## 学年比較

	2年	3年	合計
人数	68	79	147

## 1. 放送を聴く前と聴いた後で大規模地震に対する知識は、自分で増えたと思いますか？

	2年	2年%	3年	3年%	合計	合計%
ア. かなり増えた	2	2.9%	6	7.6%	8	5.4%
イ. 少し増えた	26	38.2%	26	32.9%	52	35.4%
ウ. わからない	33	48.5%	35	44.3%	68	46.3%
エ. 全く増えていない	7	10.5%	7	8.9%	14	9.5%
未回答			5	6.3%	5	3.4%

## 2. 放送の内容にあった防災知識で何か印象に残っているものがあれば書いて下さい。

	2年	2年%	3年	3年%	合計	合計%
印象に残っている	25	36.8%	31	39.2%	56	38.1%
印象に残っていない	43	63.2%	48	60.8%	91	61.9%

## 内容

2年	3年
<ul style="list-style-type: none"> <li>どこで集まるか話し合っておく</li> <li>エレベーターに乗っている時に地震にあった場合、全ての階のボタン(非常ボタン)を押す</li> <li>地震の時、塀の近くを歩かない</li> <li>地震が起こると1次災害が起こる</li> <li>普段からどこに逃げればいいのか考えておく</li> <li>水を用意しておく</li> <li>地震があった後、トイレをどうやってするか</li> <li>災害にあったら、学校によって試験を延期してくれるところもある</li> <li>火を消す</li> <li>窓を開ける</li> <li>外国人のひとの避難について</li> <li>思っていたより死者が多かった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>トイレの大変さ</li> <li>地震が起きたときの非常食</li> <li>地震が起きたとき、慌てずに机の下にもぐる</li> <li>避難所のトイレ事情</li> <li>水や非常食を準備しておく</li> <li>家で地震があった場合は窓やドアを開ける</li> <li>乗車時に地震が起こった時、カーラジオで情報を得る</li> <li>家具を固定する</li> <li>避難場所は早めに家族で確認(決定)しておく</li> <li>避難場所では家族と一緒に暮らせることが少ない</li> <li>家族のこと</li> <li>電話が繋がらない</li> <li>食料のこと</li> <li>食料のことよりトイレの問題の方が重要</li> <li>地震が起きたら先に出入り口を確保する</li> <li>避難所での個人の生活(被災者の不満)</li> <li>普段から家族で集合場所を決めておく</li> <li>サランラップを使って水を節約する</li> <li>むやみに電話しない</li> <li>避難所に入ってもストレスなどでなくなることがわかった</li> </ul>

## 3. 資料を使っての防災教育と比べ、校内放送を使ってのトーク番組風の防災教育の印象についてお答え下さい。

	2年	2年%	3年	3年%	合計	合計%
ア. とても印象に残りやすい	3	4.4%	8	10.1%	11	7.5%
イ. やや印象に残りやすい	40	58.8%	39	49.4%	79	53.7%
ウ. 変わらない	25	36.8%	32	40.5%	57	38.8%

## 4. 荒中の生徒が放送する防災教育トーク番組を聴いた印象はどうでしたか？

	2年	2年%	3年	3年%	合計	合計%
ア. 生徒がやっていたので楽しかった	16	23.5%	22	27.8%	38	25.9%
イ. 防災の内容が身近に感じた	18	26.5%	13	16.5%	31	21.1%
ウ. トーク形式なので分かりやすかった	12	17.6%	12	15.2%	24	16.3%
エ. 難しくて分かりにくかった	11	16.2%	5	6.3%	16	10.9%
オ. 先生や専門家がきちんと指導する方が分かりやすいと思う	9	13.2%	12	15.2%	21	14.3%
未回答	2	2.9%	15	19.0%	17	11.6%

## 6. 今回の番組放送を聴いた時、何か家でもしなければ考えたことがありましたか？

	2年	2年%	3年	3年%	合計	合計%
ア. その時はすごく思っていた	5	7.4%	7	8.9%	12	8.2%
イ. 何となくしなければ思っていた	28	41.2%	36	45.6%	64	43.5%
ウ. 難しくて何をしていたか分からなかった	5	7.4%	8	10.1%	13	8.8%
エ. 別に何も思わなかった	25	36.8%	23	29.1%	48	32.7%
未回答	5	7.4%	5	6.3%	10	6.8%

今回の番組放送を聴いた時、何か家でもしなければ  
考えたことがありますか？

- ア その時はすごく思っていた 7  
イ 何となくしなければ思っていた 36  
ウ 難しくて何をしていたか分からなかった 8  
エ 別に何も思わなかった 23  
無回答 1

※やろうという意識がうかがえるア、イと答えた割合

は54.4%であった。

【防災トーク番組を聴いていた当時の1年生対象】

## 設問6

今回の番組放送を聴いた時、何か家でもしなければ  
考えたことがありますか？

- ア その時はすごく思っていた 5  
イ 何となくしなければ思っていた 28  
ウ 難しくて何をしていたか分からなかった 5

表3 「あらかわ防災ステーション」聴取者の  
事後アンケート結果(2)

5. 資料の「平成20年度あらかわ防災ステーション番組表」をみて  
印象に残っている番組表を3つ選んで答えて下さい。

タイトル	2年	3年	合計
こんにちは あらかわ防災ステーションのスタート	12	7	19
地震はなぜ起こるの(1)	19	17	36
地震はなぜ起こるの(2)	11	8	19
地震は予知できるの	7	7	14
どうして被害に違いが出たの	1	1	2
揺れているときどうしたらいいの	2	4	6
揺れが収まった後はどうしたらいいの	3	1	4
人が家の下敷きになっていたらどうする	2	3	5
地震がきた時いちばん役に立ったことは	4	3	7
どうして火事になったの	8	1	9
火事はどうしてすぐに消せなかったの	3	8	11
こんなとき地震がきたら	2	3	5
電気はどうなったの	1	4	5
水はすぐに使えたの	4	3	7
水はどうやって受け取ったの	3	0	3
家のトイレは使えるの	4	6	10
連絡はどうやってとるの	0	2	2
正確な情報はどうすれば知ることができるの	1	1	2
キミの家の防災度チェック	4	6	10
食事はどうしたの	3	7	10
着替えや洗濯、暖房はどうしたの	3	4	7
避難所のトイレ事情は	5	9	14
避難所のお風呂って	3	5	8
避難所では家族一緒に暮らせたの	1	5	6
意外に役立つ身近なものは	2	4	6
被災者たちに混乱や不満はなかったの	0	1	1
避難所暮らしを快適にしたことは	0	2	2
時間とともに避難所暮らしはどう変わって…	3	2	5
避難所で子どもたちは何をしていたの	1	1	2
避難所でお年寄りや障害者は	2	1	3
外国人の人は避難できたの	4	3	7
学校はどのくらい休みになったの	4	9	13
入学試験は受けられたの	5	4	9
お父さん・お母さんが死んでしまったらどうなるの	1	4	5
ペットはどうなるの	6	12	18
電車が止まってしまったら	1	1	2
災害などで死ぬほど怖い思いをした時にどんな…	2	1	3
生死の分かれ目どこに	6	5	11
非常時に頼りになるのは	2	5	7
家で準備しておくといいい物は	2	4	6
ふだんから家族で決めておくことは	1	4	5
学校ではどんなことができる	1	3	4
うちの家具は大丈夫	5	4	9
寝る部屋で気をつけることは	13	11	24
合計	167	196	363

エ 別に何も思わなかった 25

無回答 6

※やろうという意識がうかがえるア、イと答えた割合は48.5%であった。

この調査項目についても、「あらかわ防災ステーション」の放送にパーソナリティーとして関わった生徒の方が防災に対する積極的な意識が高まっていることが分かる。

今、二つのアンケート項目だけを比較し直接番組放送に関わった生徒たちの意識の高まり、防災知識の向上がうかがえる部分を見たが、9週に渡って、地域の大人の防災ボランティアや毎回録音の際に指導した今西との共同作業の中で生徒たちの意識や取組への深まりに変化が現れていった。

【生徒たちの変容】

1. 安全委員係になりたてに唐突の話に戸惑う (10/20 放課後の専門部委員会)
2. 今までにやったことのない内容に少し興味も

3. 学校や担当の中村教諭の思いを大きく超えて、面白そうという好奇心が心を動かす (11/13 立ち上げ会議)
4. 第1週分の放送原稿が出来上がり、安全委員全員が受け取り 余りの量にやや不安感が (12/8 1/19～第1週分原稿下見)
5. 今西先生と防災ボランティア3名と担当中村教諭が入って和気あいあいと原稿の読み合わせをする中で、何だかやれそう (12/15 第1週分読み合わせ会)
6. 自分の読みやすいように原稿を変更できるんだ! (気づきと安心感)
7. 3年生6名による第1回録音日。録音への緊張はあったが、今西先生との冗談を交えての会話や防災ボランティアの女性3名のキャラクターに和ませてもらう生徒たち (12/20 「あらかわ防災ステーション」第1回録音 桃山IT親子ホール2F学習室)
8. 録音場所を和歌山大学学生自主創造科学センター(クリエ)に移し、生徒たちも防災ボランティアも初めての大学キャンパスに足を踏み入れ、更なる好奇心が芽生えた。また、スタジオで大学生が録音機材を扱い、現場で今西がいつもの通り監修しながら吹き込めたので雰囲気とやる気は最高潮となった (1/10 和歌山大学で第2週分、3週分の録音)
9. 安全委員会部長の生徒だけでなく、2年生の男子生徒の中にも表現上手で面白いキャラクターを発見し、楽しい雰囲気ができる
10. 2月に入って、3年生が受験勉強のため安全委員会メンバーが不足してきたので、防災放送の中にスタッフ募集のコメント挿入
11. 学級担任の呼びかけやチーム活動顧問の協力で新しいスタッフが数名参加し、3年生に負けず劣らずのキャラクターで放送が続く
12. 最終回の録音では、防災ボランティアと生徒の息がピッタリと合い、あうんの呼吸で収録が済み、最後には参加者全員拍手と大きな笑顔で終了することができた

3. 6. 防災ボランティアとの連携

今回の取組に協力いただいた地域の防災ボランティアは女性3名。いずれの方も読み聞かせなど社会教育の場で子どもたちをボランティアとして世話した経験のある方たちであった。

同時に、その中の一人は、阪神淡路大震災の時、ボランティアとして現地に入った経験を有していた。

この3名のうち1名は、荒川中学校が平成20年度から取組始めた学校支援地域本部事業(桃山地域共育コミュニティ事業)のコーディネーターであり、このコーディネーター奥澤氏が防災ボランティアを地域から発掘し、今回の取組につながった。

女性防災ボランティア3名は、社会教育の面で地域



内での面識も広く、多方面で活躍している人物であるが、こと防災教育に関しては、何の資格も持っていない。

今回、「あらかわ防災ステーション」への協力をお願いしたのは、初めは、放送原稿を生徒たちと一緒に読みコンテンツを作るのに、読み聞かせの経験が十分に生かすことができるだろうという一点のみであった。

したがって、3名の防災ボランティアも自分で源資料となる本から原稿を作成し、読み合わせ・録音という過程の全てに関わると思っていないところからスタートした。

#### 【地域の防災ボランティアのようすと変容】

1. 共育コミュニティのコーディネーター奥澤氏に学校より「あらかわ防災ステーション」に関わってもらえるボランティアを依頼する（10月初旬）
2. 驚きと全くの戸惑い（11/13 立ち上げ会議）
3. NHK出版の「12歳からの被災者学」という本をベースに5分間ぐらいのコンテンツを作成し、その原稿は今西が監修するということで、少し不安が消える。しかし、9週間分、44回放送の原稿づくりが本当に自分たち3人でできるか仕事量に不安は残る（11/26 第1回コンテンツづくりの打ち合わせ会）
4. とりあえず、12/20の第1回録音日までに生徒たちに読み合わせ原稿を作らなければと焦る気持ち（12/1 防災ボランティアの藪内氏宅に3名が集まりコタツを囲みながら原稿づくり）
5. 明るい安全委員の生徒たちと触れあって、大変さや不安は徐々に消えつつある（12/15 第1週分の原稿読み合わせ会）
6. 初めから女性の特性を活かし、生徒たちへ配慮しながら楽しく第1回録音 今後のペースがわずかにつかめた（12/20 桃山IT親子ホール2F学習室にて録音）
7. 大人の防災ボランティアの3名も和歌山大学での録音に好奇心を持ち臨むことができた。モチベーションが上がる大学での交流であった（1/10 第2回録音を和歌山大学自主創造センタークリエにて）
8. 1/10の和歌山大学での録音以降から、原稿づくりそのものが、防災を勉強するのに本当にためになるという発言が録音のたびに始まる。
9. 録音中のトーク風のやり取りが子どもたちとすっかり馴染んで、地域の大人と子どもが「あらかわ防災ステーション」の原稿の読み合わせや録音という一点でつながっている雰囲気が素晴らしくなってきた

10. 企画・監修いただいた今西先生と地域の防災ボランティアの関係も会を重ねる毎に緊密になり、作成原稿のやり取りも学校の介在なしにスムーズに行われ、録音当日をどんどん迎えるようになった。また、最終回は、生徒のテンションに合わせるようにアドリブを効かせた放送内容になり本当のFM放送風の録音雰囲気を作ることができた

コンテンツづくりに関して、生徒・防災ボランティア・学校・和歌山大学という4者がしっかり連携できたキーパーソンは、「あらかわ防災ステーション」の具体的な筋道をしっかりと見据えたプランナー（今回の取組では、和歌山大学の今西）が企画立案、録音に関する監修もした結果と考える。

防災ボランティアにとって、防災教育は知識の面で全くの未開拓の分野であった故大きな不安を持っていたが、回を重ねる毎に生徒たちと同様にその不安が取れ、防災知識が原稿づくりの中でどんどん増していくのは当初からの一つのねらいであった、番組放送に関わることで地域の大人自身が防災知識を深めていく取組になればと考えていたことが実現化した。

あわせて、アンケート調査を3名の防災ボランティア自身に行っていないので分からないが、この人たちが地域で防災に関する意識を高め、知識の輪を広げるコアに発展していく要素を持てたことが大きな成果であった。

今回の取組は、地域の防災ボランティアと学校・生徒がお互いに連携し、継続・発展するために必要な「やってよかった」という成就感を互いに味わえる取組になったのではないかと考える。

#### 4. おわりに

学校における防災教育では、学校の状況、地域特性を知った上で、プログラムを企画するプランナーが必要である。今回の荒川中学校の取組では生徒と同じように地域の防災ボランティア自身も防災知識の学習になった。これからの課題として、地域または学校においてプランナーを増やしていけるかが重要な視点と考える。

#### 参考文献

- 此松昌彦・今西武（2009）防災教育で行う生徒のための図上訓練の課題、和歌山大学教育学部紀要、第59集、61-66。  
メモリアルコンファレンス神戸（2005）12歳からの被災者学、日本放送協会、P239。